

# 東方光勇者

奇妙な海老

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

タイトルを改名しました。

幻想郷に現れた、魔王を滅せし外界の勇者。外界での役目は既に終わった。

だからでこそ、幻想郷は彼女を受け入れる

東方Projectの主人公こと、最強無敵の博麗霊夢。

彼女があまりにも敵無しなので、彼女と同程度の力を持ったキャラクターがいたらどうなるのだろうか、と思つて書かせていただきました。まあつまりはライバルキャラを作るわけですね。

この話の主人公は、完全に自分の考えたオリキャラです。日本神話とかギリシャ神話とか全く関係ありません。

ですので、全く面識が無いと言うわけではありませんが、出てくる東方キャラクターは大体初対面です。

それでも良いと言ってくくださるのなら、どうか一度読んでみてください。

ちなみに、この話に出てくる萃香は紅霧異変の前から有頂天に滞在しています。

理由は多々ありますが、特にと言った理由は、第一話の登場人物が、主人公と天子だけになってしまうのを避けるためです。そのため萃香には一足早く有頂天に来てもらいました。

# 目次

第四話	第三話	第二話	第一話
48	32	20	1

# 第一話

どこだろう、ここは。

目を焼くような太陽の光、周りを見渡して分かる青い世界。

天空に出現した『勇者』は、重力に引つ張られる間無表情でそんなことを考えていた。ふと前を見てみると、そこに広がるのは世界を一望できる絶景。そしてそこに浮く大地。

……ん？

なぜ、空に大地が浮いているのだろう。

勇者が思考を凝らす。

私が……ここにいるのは……なぜ？

私は……なにをして……ここにきたの？

優秀の脳裏に浮かぶのは、強大な敵との魂を削るような戦いの記憶。

魔王は確かに倒された。

世界は平和を取り戻した。

……では、私は？

私の役目は…魔王を滅ぼして、世界を救うこと。人類を救うこと。平和を手に入れること。

なら、それが終わったなら、私はどうなってしまうのか？

…簡単なことだ。仕事がなくなつたのなら、失業だ。

私は、求められなくなつた。必要がなくなつた。

私は、忘れられたのだ。

◇

少女、比那名居天子は、今日もいつもと変わらず暇そうに天界の岩に腰掛けていた。今日も今日とて地上を見下ろして、地上を見下ろすつまらない毎日。

それはもう、暇で暇で仕方がなかった。

「はあく、何か降つてこないかしらねえ」

空を見上げて適当なことを呟く天子。されどその景色は変わらず、ただ無駄な時間が過ぎて行くばかり。天子はそんな不毛な行為に嫌気が差して、すぐに上げた頭を戻してしまった。これならいつそあの小鬼でも探して、退屈凌ぎでもしようかと思つたその時、ふつ、と、天子の耳から聞きなれない風を切る音が聞こえて来る。

「何かしら…」

再度頭を持ち上げてみると、既にその何かは目の前であつて。

天子はそれを避ける暇もなく、その何かを思いつきり額で受け止めてしまった。

「うあッ!？」

突然の重力感に思わず素つ頓狂な声が出てしまふ中、落ちてきた何かはすぐに立ち上がった、クツションとなつた天子をまじまじと観察していた。

「誰よ、あんた…」

天子の目に映るのは、幻想郷らしからぬ質素な格好をした少女。旅人のようなポロポロの服を着て、地味なズボンを履いている。それとは対照的に髪の毛は金色に輝き、天子のそれのように柔らかい。表情はなく、無表情で、特徴的な金髪と合わせるように、瞳の色は碧色だ。

天子は、そんな彼女に興味を持つて、その場から立ち上がる。丈夫な体にこれほど感謝したことがあるだろうか。

「ねえ、誰なのつて聞いてるでしょ。なんであんたはこの有頂天に落ちてきたのよ」

「…ああ、そうね。有頂天つてのが何処かは知らないけれど、私は天国に来たつてこと当たり前なのかしら」

周りの景色を見ながらそう呟く少女。無視された天子はやはり機嫌を悪くして、少女

の正面に立って視界を遮った。

「ねえ、聞いてるの？ 貴女は何者？」

「…さあ？ 私は何者かしら。自分でも分からないわ」

でも、と言って少女は天子を見つめる。その瞳は、血のように深い真紅に染まっていた。

「勇者と呼ばれていたわ」

そして、少女は天子に倒れこんだ。



「おっと、目が覚めたかい？」

少女が目を覚ました先には、背丈も少女とあまり変わらない小さな女の子が座っていた。服は白のノースリーブで、紫色のロングスカートを履いている。

いや、少女と言うよりか、これは小鬼か。と彼女は思う。

彼女の目の前に座っている少女は、本来目立つはずの巨大なりボンより、さらに目立つ頭に巨大な二本の角を携えていたからだ。

「…化け物ね」



「そりや、あんたもだろう」

「なに言つてんの。私は人間よ」

「そうかい」

小鬼は笑う。その様子を見て、少女は少し気を苛立たせた。

何気に、この少女は短気である。怒りの沸点が異常に低いのだ。

その証拠に、もう既に拳を固めている。まあ、いきなり知らない奴に化け物扱いされたのだからしょうがないのかもしれないが。

「ああ、なんだかいろいろ思い出して来たわ。自分が何者なのかもね」

超人的な速さで立ち上がる少女。少女の両手から光が吹き出して、長い髪をたなびかせた。

「私は128代目光の勇者、ヒイロ。あんたみたいな化け物を滅ぼすために生まれたわ」

「128代目、ねえ。姓は無いのかい？」

「無いね。光の勇者に血のつながりは無いんだから」

そう言うと、ヒイロと名乗った少女は片手を空に向け、何かを呟いた。その瞬間雷鳴が轟き、部屋の屋根に大穴を作つてヒイロに降り注ぐ。

「さて、勇者らしく魔物を退治させてもらおうわよ」

鋭い眼光を向け、呟くヒイロ。

小鬼はその光景に大きく口を歪め、まさしく鬼のように破顔する。

「そいつは面白そうだ！退治してみろ！この酒呑童子を!!」

その瞬間、鬼は空間を揺るがし、大口を開けてヒイロに突っ込む。

するとその突進はヒイロに触れることなく、壁を突き破った。

「やつぱりあんたは人間じゃないねっ！これを避けられる人間なんて、博麗の巫女くらいのもんだよ！」

「そう、博麗の巫女とやらも対したことないわね」

砂煙を突き破って出現するヒイロ。その手には雷の大剣が持たせており、これを食らえば一溜まりもなさそう。

しかし鬼はそれを真っ向から受け止めて、両手に装着した鉄輪でヒイロの頭を薙ぎ払う。

「なにっ!?!」

しかし、またもその攻撃は虚空に消え、鬼の気づいた時にはヒイロは既に背後に立ち、雷の大剣を掲げていた。

「はあっ!!」

繰り返されるのはただの上段切りだが、そこには強大な力が感じられる。鬼はそれを受け止めることなく、そつと手を翳した。

その瞬間、大剣は鬼に当たる直前に四散し、ヒイロは顔を驚愕に染めた。

「えっ!？」

そのまま重心が傾き、鬼に身体が吸い寄せられる。視界に入った満面の笑み。そのガラ空きの腹に、神速のボディーブローが入……：：！

「ッ!？」

これには流石に鬼も驚いたのか、口を大きく開いて目を丸くする。

ヒイロは傾いた重心を治すことなく、立ったまま前転するようにして鬼の渾身のストレートを躲したのだ。

しかしながら、ヒイロもかなりヒヤヒヤしていた。自分の魔法がなかったら、いったいどうなっていたことか。心を落ち着かせて、眉間に皺を寄せてに小鬼を睨む。

しかし、鬼は依然笑った表情を崩さず、心底楽しそうに拳を構えた。

「凄いな、あんた。絶対殺したと思ったよ」

「私もよ」

どンドンと悪化して行く二人の空気。両者動かないまま、時だけが過ぎる。風の吹く音がよく聞こえるようになり、ざわざわと桃の木が揺れた。

そしてヒイロが拳を握った瞬間。

二人の距離は一瞬にして詰まり

「ちよつとあんたら！何してんのよつ！」

——だが、そんな時、天子の怒り狂う声が聞こえ、二人の動きは止まったのだった。



「はあ、本当、なんなのよあんたら」

天子の目の前で正座する二人。方や今だ楽しそうに笑みを浮かべ、方や辛そうに足を動かしていた。

その光景に非想の剣を抜きかけた天子だったが、なんとかそこでとどめ浮き上がった腰を元に戻す。

「私が桃狩りから帰ったら、いきなり家内であることをガン無視で戦闘始めちゃってるし、挙句にその余波で私の家倒壊させちゃってるし。もう、マジであんた何者？」

そう言つてヒイロを睨みつける天子。イライラとした感情を全く隠さず、これでもかとさらけ出している。

その反応に少し悪く思ったのか、ヒイロは天子の質問に潔く答えていた。

「私は128代目光の勇者、緋色（ひいろ）。仕事は魔物を滅ぼすことよ」

「ふーん。そうなの？萃香」

「ああ、確かにそう言っていたよ」

なぜか笑みを浮かべて頷く小鬼。

その様子を不気味に思い、天子は彼女から距離を置いた。

「で？ 緋色のその…光の勇者とやらは何者なのよ」

「勇者に決まってんじゃない」

「いや、そうじゃなくてこう…何をしているのか的な」

「まあ具体的に言うのと、世界を守っているの。強大な魔王の手から、愛すべき人間達を」

「そ、壮大なのね…」

若干苦笑いを浮かべつつも、よく分からない知らない人の話を簡単に信じる天子。

そこはやはり幻想郷。住んでる世界が違うのだ。

「でも天界にそんな奴がいるなんて聞いたことがないわね。幻想郷にもいたかしら？」

「いや、こんな面白い奴私が見られないわけないだろう？ こいつは外来人さ」

「ちよつと、二人して私の分からない話で盛り上がりたくないでくれる？ これでも私、結構混

乱しているのだから」

「ああ、ごめんごめん」

後ろ頭を掻いて頭を下げる小鬼。

その身体は、いつの間にか天子の隣に陣取っていた。

「しっかし、幻想郷に勇者なんて者まで現れるとはねえ、怖いもんだ」

「…そこよ、それ。幻想郷っていったい何よ？酒場？」

「いや、まあ、あんまり変わらないけれど…」

腕を組んで呟く天子。

そんな天子を遮るように、小鬼が身を乗り出して来た。

「じゃあ教えてあげようじゃないか！とりあえず自己紹介だ。私は伊吹萃香。鬼をやっている」

「へえ、やつぱり化け物だったのね。なら退治しなきゃ」

そう言つて萃香を睨む緋色。

天子はそんな緋色に凄んで、居心地悪そうに足を組み直した。

そんな情けない天子の背中を、ドンと叩く萃香。

「ほら。あんたも自己紹介しなよ。こいつは今のうちに面識を持つておいて損はないよ」

「あ、ああ。分かったわよ。私は比那名居天子。ここ天界で不良天人と呼ばれているわ」  
「へえ、天界、天人、成る程ね。確かに、ここら辺はなぜか地上から離れて宙に浮いてるし、貴方にはそう呼んでも差し支えない程穢れが無いわ」

「それは褒めているのかしら…」

一人で納得している緋色。長たらしい説明をしなくて済んだと、天子は内心喜んでいった。不良天人なんて言ったから少しは突ついてくるのかと思つたが、案外そんな物は気にしない性格のようだ。

どうやら穢れを見ることができるようだし、もしかしたら天人の存在を知っているのかもしれない。

「それで、幻想郷とか言う物のことなんだけれど」

「ああ、それが本題だったわね。めんどくさい」

心底面倒くさそうに頷く天子。

ぱっぱと進めてしまおうと、かなり掻い摘んで説明した。

「幻想郷って言うのは、妖怪、えーつと…あんたで言うところの魔物？と、人間が共存している世界のことよ。本来は外界から特殊な結界で隔離されているのだけれど、たまにあんたみたいに結界を抜けて迷い込んで来る奴がいるわ」

「へえ、それは凄いわね。魔物と人間が共存するだなんて…そいつらは滅ぼしてしまつて構わないの？」

「いやいやダメでしょ。共存つて言つたわよね？一緒に住んでるやつ殺さないでしょ普通」

「む、確かにそうね。でもそれだと私の生き甲斐がなくなつてしまうわ。どうしよう」

ああそれなら！と大きな声を出して立ち上がる萃香。萃香はタツタツと走って行って、天界の端から顔を覗かせた。

「見なよほら。赤い霧が出てるでしょ？」

「確かにそうね。微量ながら魔力も感じるし……」

「あれを異変と言つてね。幻想郷でたまに起こる人為的な事件のような物で、異変を起こしている首謀者と、その仲間たちなら、問答無用で退治してしまつて構わないのさ」

「そうなの？」

天子と息を合わせる緋色。

天子も緋色も、幻想郷についてはあまり認識が薄いのだ。

だからかなりねじ曲がつた解釈も信じてしまう。

「まあ一応ルールはあるけどね。最近できたものでスペルカードルールつて言うんだけど、こういう札を使つて弾幕決闘とやらをするんだと」

「へえ、ちよつと貸してもらつて良いかしら？」

「良いよ」

萃香から渡された白い紙をマジマジと見つめる緋色。

その時、白い紙はいきなり発光しだし、その表面に先程にはなかった謎の絵が描かれていた。



「ふーん、思ったとおり。持ち主の思考に反応するようね」

「おお、よく分かったね、さっきのはただの紙だったけれど、今正式に緋色のスペルカードに変わったよ」

「なによそれ。私にも頂戴」

「良いよ。自分の出したいと思った弾幕を想像するんだ。曰く、美しい程よいんだと」

「そうやって五枚ほどスペルカードを作って行く二人。最初に作ったものにはどうやら華と回避するための隙間が無いらしくボツになった。」

「なぜ隙間なんて作るのかと非難する声が聞こえたが、そういうものだと言って聞かせた。」

「そして、やっと二人のスペルカードが完成する。」

「これで良いね。五枚もあれば十分だ。どうだい？早速試してみるか？」

「そうね。手始めに異変とやらを解決してみようかしら」

「そりや良い」

「そう言つて有頂天の端に立つ緋色。」

「そして何分かが流れ、萃香達が不思議に思う中緋色は背後を向いてこう言った。」

「……また落ちるの？」

「……ええ？」

光の勇者緋色は、自力では空を飛べないのであった。



「はあ、なんで私まで行く羽目に……」

「天子く、そんなにため息ついてると幸せが逃げちまうよ」

「誰のせいだと思ってるんだか」

自力で飛べない緋色のために考えたのが、天子の要石で緋色を疑似的に宙に浮かすことだった。

小さな要石の上で上空の強風に耐えるのはなんとも精神力がいるもので、そこに座つて微動だにしない緋色は、流石勇者と呼ばざる負えない。

「そろそろかしらね」

「お、確かにそうだ。大きな力が渦巻いてるね。弾幕決闘の最中かな？」

空中で飛びながら聞き耳を立てる萃香。その光景はなんともシュールだ。

「言っておくけど私はあんたの戦いに加勢したりしないよ」

「そんなのもとよりいらないわよ」

「ははっ、そうかい」

大口を開けて笑う萃香。その光景は可愛らしくもあり、同時に雲のような掴み取れなさを演出していた。

「ふむ、少し紅魔館まで時間があるね。ちよつと質問して良いかい？」

「別に良いわよ」

紅魔館と言う今回の異変の首謀者の居る館へ向かう途中、萃香は緋色に質問をしていた。

「あんたの能力はなんだい？」

「能力う？」

「ああ。みんな持つてるはずだぞ。私は『密と疎を操る程度の能力』ってのを持つてる。あの時緋色の雷の剣を消したのはその能力さ」

成る程、と緋色は感嘆する。

特に何も無い上段切りでも、身体を真つ二つにするくらいのは力は込められていたからだ。それを四散させたとなると、何かタネがあると思つても仕方が無いことだろう。

緋色は少し考えて、その話題を天子に受け流す。

「そうねえ…天子は持つてるの？」

「え、ああうん。『大地を操る程度の能力』…だったかしら」

始めて名前を呼ばれたことに、若干ドギマギしながらも、なんとか言葉を紡ぎ出す天

子。生まれてこのかた、同年代(?)の友達などできたことがなかったからだ。

「へえ、強そうね。羨ましいわ」

「そうでしよう?」

無い胸を張って得意げに緋色を見る天子。その顔には明確な自信が浮かんでおり、それを緋色は素直に羨ましいと思った。

「で?緋色はどんな能力を持っているんだい?」

「私の能力:うーん、そうねえ:あえて言うなら:『勇者の力を持つ程度の能力』:的なの?」

要石の上で胡坐をかく緋色。

萃香はその後ろに立って、緋色の顔を覗いて微笑した。

「じゃあ、あの時私の攻撃を躲したのもそれのお陰かい?」

「そうよ。勇者の力の全てである『白魔法』。代ごとに操る物が変わってくるけれど、今の私は光を操ることができたわ。そして、私の真骨頂はそれを利用して回避すること」

緋色は萃香をがっちりと掴んで、自分の胡坐の上に置く。最初は驚いた萃香も、まあ良いかと身を任せた。

今の萃香の体制は、緋色にすっぽりと収まっているような形にある。まるで仲の良い

姉妹のようであった。

「私が光源になつて光を発して、それに反射する物体を回避する……らしいわ。まあでも、この力はわからないことだらけだけれどね」

「今代つてことは…先代もいるんだろう？強いのかい？」

「先代の力は炎だったわ。あの太陽にも及ぶ熱と、その恩恵である攻撃力が売りだったつて。多分、強かったと思うわ」

「それじゃあ、先代は炎の勇者つてことか？」

「いや、そんなことはないわ。どんなものを操ろうと光の勇者は光の勇者。ただの呼称よ」

だが、先代が炎を操るならば、この緋色という少女は確かに光であるだろうと萃香は考える。

先程の説明にもあるし、何より、先代の容姿は萃香には分からないが、この煌めくような美しい金色の髪が、全てを物語っているようだった。

「そつか…じゃあ、なんで緋色はここに来たんだい？」

「え？」

「幻想郷は、忘れ去られた物が集まる土地。そんな勇者様が忘れ去られるなんて、どういふことかと思つてね」

「…」

ただ純粋に自分の感じた疑問をぶつける萃香。その質問に、緋色は少し考える。

思いつかれるのは終わらない戦闘の日々。そこから考えられる回答と言えば、もうこれより他は無かった。

「さあね、魔王を倒したからじゃない？」

感情のない表情で、緋色はそう言った。その顔の真意が分からない萃香は、黙ってそれを見上げるしか無い。

すると、そんな空気を掻き消すように、天子が元気良く声を出した。

元々明るい性格を持った比那名居天子。こういう雰囲気は慣れてなかった。

「ほ、ほら。見えて来たわよ！あれが紅魔館かしら？」

「おお、確かにそうだ。力の流れが止まっているから、もう弾幕決闘終わった後かな」

林から抜けたその先に、巨大な紅い館が見えた。

その館の目の前にある門は、ボロボロになって開かれている。その姿からは、少し前に何かがあつたことが容易に想像できた。

「よし、そろそろ降ろすわよ。気をつけなさい」

「分かったよ」

その瞬間消え去る要石。

それに少々驚きつつも、緋色は難なく着地した。

「ん？こいつも化け物ね。殺しておいた方が良いかしら」

「殺しはダメだよ。やって良いのは退治だけ」

開かれた門に横たわるのは、目をグルグルと回転させて気絶している赤髪の妖怪。

そんな満身創痍の妖怪にトドメを刺そうとする緋色を、寸前で萃香が止めた。

「んじやまあ、取り敢えず中に入れてみるわ。ちやつちやと終わらせて帰ってくるから、待っててよね」

手に雷の大剣を掲げて宣言する緋色。その後ろ背中中は、まさに勇者と言う者だった。

## 第二話

カビ臭い本棚の匂い。

いつものものかも分からないような埃にまみれた本たちに、緋色は目を回していた。

どこへ行つても本、本、本。

特別強い気配を辿つて、たどり着いた場所がここだった。

先程から特殊な服装をした妖精達が弾幕でお出迎えしてくれたが、緋色に妖精を倒す気は全くなかった。緋色が相手をするのは、妖怪を含めて魔物のみ。自然の権化である妖精を狙おうなどと、勇者として断固としてできることではなかった。そのせいで、背中にはずっと弾幕が当たっているが、緋色には些細なことである。ちなみに、ダメージすら通っていないのか、緋色の回避は発動しなかった。

そして、そんな妖精達をどこか敬いながら無視するという器用なことを行っている間に、何か物音が聞こえるようになった。

物音は緋色が近づいてゆくにつれドンドン大きくなつて行き、地震のように膨れ上がる。そしてその音が弾幕決闘をしている音だと気づいた時には、その光景は既に緋色の目の前で展開されていた。



「そんな弾幕じゃあ擦りもしないぜー」

無意識に身を引く緋色。その目前を、何か白と黒の色合いを持った謎の人型が通り過ぎた。

緋色は思わずその白黒を目で追う。

その視線の先には、これでもかと光を振りまく、魔女のような服装をした女の子がいた。

少女は手に持つ箒に跨りながら、高速でこの本地獄の中を飛翔する。

そして、そんな少女に弾幕を撃ち続ける人影が一つ。

紫色の、パジャマのような服を着た少女が気だるそうに浮いていた。

その紫色の少女は、空中に出現した魔法陣から絶えず弾幕を撃ち続ける。色とりどりの魔力の弾が、白黒の少女に向かって飛んで行った。

しかし、これが弾幕決闘か、と緋色は感心する。美しさを競い合うと言うくらいのもので、ただ、これだけ美しいものかと思っていたが、確かにこれは魅せてくれる。

血なまぐさい肉の道を歩いてきた緋色には、このような世界は遙か遠くの物であった。だからでこそ、このスペルカードというルールに抑えられた非殺の戦いが、どうしても清らかで美しい物に見えてならなかった。

「これで終わりにするぜー！恋符『マスターパーク』!!!」

少女がそう宣言した瞬間、館が揺れ、極太の光の柱が撃ち出される。

それを見た紫色の少女は、どこか諦めたような表情をした後、避ける間も無く食らってしまった。

轟音とともに倒壊する巨大な本棚。それを軽やかに避けながら、緋色は勝者の少女の下へと歩み寄った。

少女は緋色の顔を見るなり、すぐに警戒の色を見せ、武器と思われる小さな箱を緋色に突き出す。

「なんだ、新手か？私はこの異変で最高にハイになってる。手加減はできないから、逃げるなら今のうちだぞ」

フン、と余裕の表情を浮かべながら緋色を挑発する少女。その表情からは、秘められた自信がひしひしと伝わってきた。

ここでこの少女の相手をするのも良さそうだが、と緋色は彼女の姿を見上げる。緋色は空を飛ぶことができないので、必然的に見下ろされる形となってしまうていた。

「…じゃあ、やめておくわ。貴方は強そうだし、面倒だ」

これは本心であった。

明らかに弾幕決闘に慣れている彼女を相手していると、勝つにしろ負けるにしろ、時間をかけてしまうのは明らかだったからだ。

だから、ここはおとなしく引き下がる。

「はっ、そうか。じゃあな！」

そう言つて飛び立つ少女。姿がだんだんと小さくなって、やがて見えなくなった時に緋色は歩き出した。

（この先、何かあるわね）

この先とは、今の飛んで行つてしまった少女にも気づかれなかった、この本地獄の部屋にある小汚い扉であつた。

濃厚な魔物の気配を感じる。おそらくこの先に存在するのは、紛れもない化け物だろう。緋色はその扉を開けようと、取っ手に手を添える。

「貴方。その先に行くのはやめておきなさい」

ふと、緋色の後方から声が聞こえた。緋色はゆつくりとした動作で、背後を振り向く。

そこには、先程白黒の少女に敗北した紫色の少女がいた。

少し周囲を見渡してみれば、倒れたはずの本棚が全て元通りになっている。目の前の少女が何かをしたのだろう。彼女の周りからは、薄い魔力が漂っていた。

「どっとうしゅっ。」

緋色はその少女の警告に質問を返す。すると少女はいつの間にか机に腰掛けており、分厚い本をめくつていた。

「その先には、正真正銘の悪魔がいるわ。入ったら、死ぬ」  
「そう。なら、慣れてるわ」

ガチャリと音がして扉が開く。

その先には、蠟燭の一つも無い真つ暗な階段が続いていた。

緋色は両手に魔力を込め、光に変えて放出する。それによつて暗い道は照らされ、警戒することなく入ることができるようになった。

緋色は躊躇うことなく侵入する。不気味に変色した、血のような色の汚れた壁が続く。外とは打つて変わつて、全く掃除されていない埃まみれの階段が続く。しかし、緋色にとつてはむしろ心地よい。魔物のいる洞窟に入った回数など、数え切れないほどにある。

この光景は、緋色にとつては日常茶飯事のことであつた。

「…ねえ。貴方、何者なの?」

「勇者よ」

ガチャリ今度は閉まる音。紫色の少女は扉を見つめて、やがて溜息を吐いて本をめぐつた。



扉の前に立つ緋色。

最後の砦とでも言いたいのか、強力な結界で守られた扉が、緋色の行進を阻んでいた。「ふん、なんの特徴も無いただの結界。最低人除けの術くらい施しておくべきだったわね」

絶えず発光する右手で、シンプルに結界を殴り壊す。攻撃に耐えきれなくなった結界は、ガラスが割れるような音と共に無残に砕け散った。

「これが本当の黄金の右つてね」  
呑気に独り言を漏らす緋色。

結界が壊れたことによって、結界に抑えられていた膨大な妖力が途端に溢れ出した。しかし緋色はその妖力を物ともせず、いつも通りの表情で扉を開く。

「お邪魔しまーす」

一応挨拶をしておく緋色。少しも止まることはなく、扉は全開に開かれた。

そこで、緋色の動きが止まる。

緋色の視線の先にいるのは、ナイトキャップを被った見た目十歳にも及ばない金髪の女の子。それをサイドで一つに纏め、真っ赤なりボンがよく目立っていた。服は半袖の洋服を着ていて、瞳と同じ真紅の色をしている。

そして最も特徴的なのは、背中から突き出る謎の物体。二対の枝のようなものから、虹色の結晶のような物が浮いている。

そんな少女が、ボロボロで小汚い個室の中心に座っていた。

「だあれ？」

その時、緋色の脳髓に戦慄が走る。

萃香の時からずっと我慢していたが、もうそろそろ限界であった。

小首を傾げて見上げる少女。

緋色は静かに彼女に近づき、少女の正面に静かに座った。

「？」

不思議そうに少女は見つめる。

しかし、緋色の顔は俯いていて、その表情を読み取ることはできない。

「ん〜？」

少女はその小さな身を屈めて、緋色の顔を覗き込む。そして見えるかと思つた時、緋色の両手が少女を抱きしめた。

「もう我慢できない！こんな小さくて可愛い子…久しぶりに出会ったわ！」

「わわっ」

少女は体勢を崩して緋色の胸に飛び込む。緋色はそんな少女を軽く持ち上げ、自分の

足の上に乗せた。

実のところ緋色と言う少女は、可愛い子供が大好きだった。その小さな掌、ぱっちり開いた眼、可愛らしい容姿。その全てを緋色は愛している。

人を助ける時も、最優先にするのは小さな子供。子供を助けるためならば、緋色は必死で戦うことができる。原因は、今は亡き妹。魔物に食われ、助けられなかった妹の事を、緋色は今でも悔やんでいた。

「ねえ、貴方さあ、名前なんて言うの？」

「ほえ？」

満面の笑みで言う緋色。今は光っていない彼女の右手が、ちゃっかり少女の頭を撫でていた。萃香の時は彼女の年配女性のような逞しい喋り方から、なんとか自分を押さえつけることができていたが、この少女相手にはそうもいかない。見た目相応の仕草や反応から、ついに緋色は我慢できなくなったのだ。

そしてそんな緋色の奇行のせいで、イマイチ状況を理解していない少女。少し混乱を残したまま、緋色の質問に律儀に答えた。

「…フランドール」

「へえ、フランドールかあ。良い名前だね」

「…」

少し呆然とした表情をする少女。

生まれてこの方今に至るまで、自分の名前を褒められたことなど一度もなかった。

そして少女は、興味が湧いた。

この目の前にいる変な女のことを知りたくなつたのだ。

「じゃあ、貴方の名前は？」

「うん？ 私は緋色。ヒーローよ」

そして、フランドールは笑う。

真つ赤な口を三日月型に変え、僅かに気配を変化させた。

「ヒーローかあ、良いなあ。やっとな助けに来てくれたの？」

「助けて欲しいの？」

「私ね。ここから出た事が無いの」

「ここって…この部屋の事？」

「そう。495年間ね」

「へえ、495年間使ってるんだこの部屋。頑丈なのね」

「…貴女、私人間じゃ無いって気づいてたの？」

「そりやそうよ。人間にはそんな変な物、生えてないわ」

そういつてフランドールの背中を指差す緋色。その指の先には、枝と結晶のような変



な物が生えている。

するとフランドールは少し怒ったように唇を尖らせ、その変な物を優しく撫でた。

「変な物じゃ無いわ。これは翼。私が空を飛ぶための物よ」

「ふーん。それでどうやって飛べるのかしら。素敵ね」

「お姉様のはもつとちゃんとした蝙蝠の翼なんだけどね」

「お姉様がいるんだ。会って見たいわ」

「お姉様は頑固なの。私を外に出してくれなくて」

「何かやらかしたの？」

「そうねえ…遊びましょ？そうすれば、私がお姉様のか分かんと思うわ」

「へえ、謎解きみたい。何して遊ぶ？」

「弾幕(ごっかん)」

「…ああ。そんな名前もあるのね。知らなかったわ」

緋色の身体から離れるフランドール。

緋色は名残惜しそうに溜息を吐いて、その場から立ち上がった。

フランドールの翼がゆっくりと揺れ、その身体を宙に浮かせた。

緋色は空を飛べないから、フランドールに追いつくことはできない。

「良いかしら？簡単には壊れないでね」

「当たらなければ良いんでしょ。私の得意分野だわ」

緋色の両手から光が溢れ出す。光は球体のような形をとって、緋色の周りを衛星のよう回転させた。

緋色の口が歪む。この状態こそ、緋色の戦闘態勢であった。

「何その光。私吸血鬼なの、だからちよつと苦手」

緋色の光球を前にして少し顔をしかめるフランドール。緋色それをすこし笑って、光球を少し速めに回転させた。

「あら、悪いわね。でもこれが一番動きやすいの。手から出たら斬ったりする時邪魔になるし」

「貴女は眩しくないの?」

「調整してるわ」

「そーなのかー」

天井に手を翳すフランドール。

その手の中に、四角い何かが出現した。フランドールのスペルカードである。

「賞品は何にする?」

「コインいっこ」

「コインいっこ?金貨なら一個でも人命くらいは買えるのだけれど」

「あんたがコンテニユーできないのよっ！…っで、え？」

「人くらい金で買えるわよ。奴隷貿易って知ってる？」

「外ってハードなのね…」

「ルナティックよ」

赤黒く発光するスペルカード。

その光が強まった時、フランドールは叫んだ。

「禁忌『克蘭ベリートラップ』!!!」

## 第三話

「すごいーよけられるんだねー」

地下にフランドールの声が響く。

その視線の先には、弾幕と戦う健気な人間の姿があつた。

「空を飛ばないって…本当に…不便っ!？」

全身を覆うような弾幕の嵐。

四方八方から襲いかかる青色の大玉に、緋色はなんとも悩まされた。

助走をつけて大ジャンプ。そのまま勢いに任せて弾幕に突っ込み、身体を僅かに動かして細かい物を回避する。そのため身体中に細かい傷が入り、服もボロボロになつているが、緋色は一度として被弾しなかつた。

しかし、これは能力の力では無い。緋色の能力は、弾幕決闘においてまさに禁手。これを使つてしまつてはあまりにも勝負にならないので、緋色はこの能力をスペルカードに封印した。

「ぐうっー」

脇目も振らず壁を蹴る。片足ではなく両足で。すると緋色の身体は僅かに宙に浮き、

その下を大量の弾幕が通った。そのまま手を下にして地面をつき、腕力だけでジャンプする。

「こっちからも行かせてもらおうわ」

空中で体勢を立て直しスペルカードを出現させる。スペルカードは緋色の人物像を表すかのように発光し、その中でも緋色は目を閉じなかった。

「勇符『母国の下の大迷宮』!!」

緋色の周囲から黒い人型の人形が現れ、フランドールの弾幕を消し去ってゆく。

緋色以外のあらゆる物に襲いかかる人形。フランドールが迎え撃つが、人形は穴を開けただけで、すぐに復活してしまう。

そして適当に暴れまわった後、それぞれ違う場所にとどまって動きを止めた。

「…終わり?」

「まさか」

その瞬間、人形に突き刺さる光の矢。胸に穴を開けた人形は、身体を膨らませ爆発する。

人形の血肉は弾幕となり、細長いレーザーと共に歪んだ形をした弾幕がフランドールを襲った。

「私のスペルが終わった時に…タイミングが悪い!」

空を飛び、弾幕の隙間を縫って行くフランドール。グレイズを繰り返し、ギリギリで弾幕を避ける。

急停止して宙返り。そのまま天井に向かって飛び、天井を駆ける。

小さくジャンプ。翼の力を逆噴射し、強制的にスピードを落とす。

「禁忌『レーヴァテイン』!!」

フランドールの手に巨大な炎剣が出現する。それを後頭部まで振りかぶって、緋色に向かつて一気に振り切った。

「う、おおおおおおお!!」

いきなり放たれた剣撃に、思わず大声をあげて驚く緋色。脳天目掛けて振り下ろされる炎の剣を、肩を引いて鼻先で避け、勢いを殺さないままバックステップ。傍らに人形を従えて、再度フランドールに突っ込んだ。

「何体いても変わらないよ!」

総勢数十体もの人形が、フランドールの炎剣によって駆逐されて行く。しかし、緋色の目的はなにも人形を精製するだけのものではなかった。

「雷鎚『ミヨルニル』!!」

人形が消え去り、ようやく視界が晴れるフランドール。するとその先には、アイデンティティである長い金髪をたなびかせた緋色が立っていた。その手には、レーヴァティ

ンとタメを貼るほど巨大な、金槌の形をした光。

しかしこれはただの光では無い。フランドールはおろか、幻想郷に在るどの人物も拝んだことが無いだろう、電子で作ったハンマーだった。

「見てよこれ。強そうでしょう？でもね、別にあつても痛く無いわよ。これは弾幕ごっこ用」

これが本当に弾幕決闘初心者同士の戦いなのか。空を飛べないはずの緋色が、アクロバティックな動きで狭い部屋を動き回る。ミョルニルと呼ばれた電子の金槌を振り回し、フランドールのレーヴアテインと鏑迫り合う。そしてとうとう部屋の扉を突き破つて、緋色達は地下の階段を高速で駆け上がった。



赤い館の門前で、青い髪の少女は立っていた。

「退屈だわ…ねえ、私が紅魔館に入ってはいけないの？」

「いけませんね。今は両者とも白熱してるようですし、何より妹様が動いてらっしゃる」

天子のが話しかけるのは、ボロボロの門で横たわっていた赤髪の妖怪。

この館の門番を務める、紅美鈴と言うらしい。

美鈴は先程まで気絶していたとは思えないほど軽やかに動き、地面に手を当て何かを拡散させた。

「あ、グングニルを出しましたね。決着をつけるつもりでしょう」

「ねえ、あんたには何が見えてるの？ 訳分かんないんだけど」

「あ、咲夜さんの方はもう終わったようですね。馬乗りしてナイフを首に当てている：  
本当に弾幕ごっこですかこれ」

「ねえ、そろそろ怒るわよ」

天子を無視して呟く美鈴。

美鈴が今行っていることは、美鈴の能力を応用した、気の動きを読んで今の状態を確認すると言う離れ技。

美鈴の脳裏に浮かんでいる光景は、白黒の魔法使いを打破した上司と、グングニルを取り出した主。

美鈴は冷静にそれを見分け、戦況の判断をして行く。

——戦況は劣勢。お嬢様は押されてますね。

しかし、そんな判断をしても、美鈴の顔色は変わらない。

美鈴のする事は、門を守ることだけでは無い。

美鈴の預かった本当の仕事は——



「フランドール様。私に手間かけさせないでくださいよ」

—— フランドールと言う少女を、決して外に出さないことだった。



「どけえええええ!!」

「きやあああああ!!」

図書館に響き渡る高い声。

その声の主はなんと、あの動かない大図書館、パチュリー・ノーレッジの物であった。

「(こっこん)、小悪魔! 直ちに防御呪文を!!」

「ひいひい! 無理でええす!!」

必死に本棚にバリアーを張っているパチュリーと、無様に吹き飛ばされている従者の小悪魔。

彼女達の視線の中心にいるのは、地下に封じ込めた化け物と、それを引き摺り出した勇者。

何が勇者よ! とパチュリーは憤怒する。何せそこで戦っている金髪の勇者は、封印したはずの魔王の封印を、いとも簡単に解いてしまったからだ。

「雨よ！雨を降らせええええ!!」

思わず叫んでしまうパチュリー。魔法一つ使うにも、いちいち叫んだりしなければもうやっていけないのだ。

「だ、駄目です！赤い霧が邪魔になって上手く魔力が回りません！」

「ほ、本当だ！レミイぜってーぶつ殺す!!」

最早先程までの落ち着いた雰囲気の彼女はいいない。ここにいるのは、うっかり余所者を地下に招いてしまった魔女と、その行動を咎めなかつた気の弱い悪魔。

まさに自業自得、身から出た錆。

その事を頭では理解しているパチュリーだからでこそ、つい怒りの矛先を親友に向けてしまうのだ。

…まあ、親友にも一応非はあるのだが。

「あたら、そろそろ効果が切れて来たわ。次のスペルに行こうかしら」

「行かせないよ！禁弾『カタディオプロリック』!!」

パチュリーの目の前に広がる地獄絵図。四人の妹様がそれぞれ炎の大剣を持って暴れまわる姿。

それはもう、絶望の具現化でしかなかった。

「小悪魔！レミイを連れて来なさい！暎夜でも良いわ！」

「で、ですが！お嬢様は今博麗の巫女と……」

「良いから！レミイと博麗の戦いなんてどうでも良いから！速くっ！速くしてえ!!」

「はいいいいい！」

目尻に涙を浮かべながら飛び去って行く小悪魔。その背中を見送りながら、パチュリーは親指の肉を噛みちぎった。

傷口から溢れる生暖かい血。パチュリーはそれを垂らしながら、赤い魔法陣のような物を空中に書いて行つた。

そして、完成する魔法陣。魔女の血を対価に支払つたその魔法には、途轍もない量の魔力が込められていた。

「火水木金土符『賢者の石』!!」

刹那。化け物と勇者の周りを、五色の弾幕が駆け巡る。それらはランダムで乱走し、瞬く間に彼女達の逃げ場を封じた。その弾幕は、既に弾幕ごつこの物では無い。避ける隙間の一切無い、壁のような弾幕であつた。

勇者の頬が釣り上がり、第三者の乱入を歓迎する。

化け物は空高く飛翔し、自らの分身をその身に戻して叫んだ。

「邪魔しないでっ……」

秘弾『そして誰もいなくなるか』  
その瞬間、化け物の体は消え去った。

「いなくなった…?」  
フランドールの身体が闇に消え、その空間に勇者だけが取り残される。

突如として姿を隠したフランドールに、嫌な予感を感じた緋色。

そこから少し飛び退いて、思ったとおり弾幕が炸裂した。

「うわっ!」

頭を逸らして弾幕を回避する。

そのまま出した情けない声とは反して、身体が前に駆け出した。

「とおっ、つて…はあ!」

フランドールの弾幕を避けようと、前に走って行った緋色。その背中を、謎の弾幕が襲う。

前から飛んでくるフランドールの弾幕と、背後から迫ってくる五色の弾幕。

いくら緋色が超人的な動きができるからと言って、絶対の物では無い。

それこそ、こんな状況をひっくり返せるのは、博麗の巫女程度のも物であったが…

「勇者総代として、負けるわけにはいかない！光符『光の因果』!!」

二つの光球が高速回転し、周りを突き刺すような光で照らす。

襲いかかる何百もの弾幕。しかし緋色は動かず、その場にただ立ち尽くした。

そして、躲す。躲す躲す躲す。

身を少し引くと大量の弾幕が虚空を切り、前に向かって走ってるだけでもその身に弾幕が当たることはない。

まるで弾幕が緋色を避けているようだ。しかし、これは単なる偶然の賜物などではない。緋色は何から何まで計算し、最適な動きを導き出しているのだ。

それは、緋色の能力によるもの。今代の勇者の真骨頂は回避。二つの光球の発する光が、反射するものを観測し、あらゆる攻撃を分析する。そしてその結果を回避する為の最良の動きに変化させるのだ。

故に弾幕にできた穴を通ることもできるし、必ず当たると思われる状況でも何が何でも回避する。それこそ、関節を外したりも平気でする。勿論、その際の痛みもなんやかんやで回避するが。

緋色の能力は、もはや『光を操る程度の能力』と言っても過言ではない。光の全てを観測し、それらを自由自在に操る。今代光の勇者は、まさに光の勇者であった。

そして勇者は弾幕を避けながら図書館を駆け回り、五色の弾幕の発生元を見つける。

「あんたか！変な弾幕出してんのは！私はフランドールと遊んでるの。邪魔しないでくれるかしらー！」

「こっちの台詞よ！妹様を外に出さないでいただけける!？」

「なんでさ！あの娘は495年間あの部屋にいるらしいじゃない！どんな事情があるのかは知らないけど、もうそろそろ出してあげても良いんじゃないやなくて?」

「駄目よ。彼女は情緒不安定で、なにをしかすか分からないわ!」

「そんなの誰だってそうだわ！大体、あんたが私を部屋に入れたんじゃない!」

「貴方が勝手に入ったゴホッ!…ゴホッゴホッ!!」

急にむせだすパチュリィ。腰を屈めて苦しそうに咳を吐く。

それを見て多少は心配する緋色だったが、その間にも自分はずっと弾幕を避けていることに気づいて馬鹿らしくなった。

「まあ良いわ。あの部屋も適当にぶっ壊れてたし、数日は戻れないわねえ」

「…それは貴方がやったこと?」

「いいや、違うさ。これやってる間に壊れたんだ。恨むなら私じゃなくて、これ考えた奴にしてください」

そう言つて緋色は手にスペルカードを召喚する。そしてすぐに消して、その場で宙返りをした。

そして溢れ出す弾幕。

緋色はそれをやはり回避した。身体を何度か捻って弾幕を受け流し、安全地帯へ着地する。パチュリーにはまるで緋色が踊っているように見えただろう。

「……スペルカードルールで、物が壊れることは少ないわ。勿論、人が傷つくこともない」

「あら、そうなの？」

「けれど、貴方はボロボロで血を出している。擦りもすれば多少は傷つくけれど、貴方のそれは異常だわ」

パチュリーの言うことは正しかった。確かに、緋色の服はボロボロで、ほぼあらゆる部位から血を出している。しかし、その傷は既に弾幕ごっこの範疇に収まる物ではなく、完全に戦闘による物だった。

「この様子では地下の部屋ももう原型は無いでしょう。つまりはそういうことよ。分かったかしら？あの娘の異常性」

「…成る程」

そして消える弾幕。

闇からフランドールが現れて、緋色の前に立った。

「非殺傷を貫く弾幕ごっこので、人が死ぬ弾幕を放っている、と」

「……手加減できないの」

「ふーん」

パシユ。

小さな音が図書館に響いた。

フランドールは目を丸くして緋色を見上げる。

「はい被弾。私の勝ちよ。コインいっこくださいな」

「……は？」

緋色はフランドールの頭を撫でながら、腰を折って頭身を合わせる。

緋色が放った小さな弾は、フランドールに被弾して儂く散った。

「それで人命買いに行きましよう？私の治療、早くしないと死んじゃうわ」

「……でもまだ一枚残って」

「良いじゃない。私はスペルカード五枚しか無いの。最後のスペルカードは外で使いましよう？外はとっても楽しいわ。495年間なんて、きつとすぐに忘れちゃうわよ」

「……」

「……なんて、本当はもうやめてほしいだけ」

フランドールは、呆然とした表情で緋色を見る。緋色は、満面の笑みでそれを返した。

「ふふ、私もね、貴方ほどでは無いにしても、ずっと一人ぼっちだったのよ」



「…どうして？ 緋色はこんなに強いのに」

「そりや、勇者だからよ。生まれた時から戦って、殺して、滅ぼして。六歳くらいの時よ。最初に殺したのは貴方みたいな魔物だったわ」

ピクリと跳ねる肩を撫でながら、緋色は優しく過去を語る。

「それからはずっと、誰も話しかけてくれなかったわ。そりやそうよ、だって、六歳のガキンチョが、魔物をバツサリ殺しちゃったもんね」

なんの気負いもすることなく、ただ笑いながら言う緋色。その笑顔には何時ものような光が無くて、何処か萎れているような印象を、フランドールは受けた。

「貴方は人を殺したことがある？ 同族を殺したことはある？」

「…多分、無いと思う」

「…凄いのね。本当に凄いわ。私より長く生きてるのに、私よりも良い子だなんて」

「でも、それは私が引きこもっていたからで…外に出たらすぐ…」

緋色の頭を手をかざすフランドール。

「キュツとして」

「ツ!？」

反射的に頭を倒す緋色。

「ドカーン」

フランドールの手が縮んで、後ろの壁が崩壊した。

空中で粉々になる図書館の壁。塊の一つ一つが分解され、やがて全て塵となった。

「…これが、貴方の能力か」

「なんでも壊しちゃうの。この手で」

確かに危険な能力だ。

今のが反射的に出る物ならば、途轍もない脅威となるだろう。制御できないということとは、無差別兵器と同じであるからだ。

その瞬間、突然立ち上がる緋色。顔のすぐそばに手を上げて、思わずフランドールは目を瞑った。

「…危ないわね。フランドールよりも、もっと」

「そうかしら」

フランドールの背後に現れたメイド服の女。銀色の三つ編みを左右に揺らして、右手にナイフを持っている。しかしその手は緋色に掴まれて、フランドールに当たる寸前で止まっていた。

「咲夜…」

「妹様、外に出てはなりません。今すぐお戻りください」

「駄目よ。部屋はもう無いわ。今頃瓦礫の中よ」

「…」

空気を切るような特徴的な音。緋色は空いた左手を頭上に上げ、何かを掴んだ。緋色はゆっくり手を開いて、掴んだ物を確認する。手の中にあつたのは抜き身のナイフ。銀色に輝いて、緋色の光を反射した。

いつ投げたのかと推測するも、すぐに取りやめ投げ捨てる。そして緋色は笑顔を浮かべ、フランドールの頭を撫でた。

「大丈夫よフランドール。私を誰だと思ってるの?」

「…緋色」

「そう、ヒーローよ。だから助けてあげるわ」

「でも…私は妖怪だよ?」

「ヒーローは妖怪でも助けるのよ。彼奴らは化け物よりも化け物なんだから」

やがて、メイドの抵抗はなくなり、ナイフを下ろして手を下げる。

緋色は顔を近づけて、自由になった両手でフランドールを強く抱きしめた。

「貴方が一日100壊すなら、私が一日100守るわ。1は貴方よ、フランドール」

「…:…うえ」

ぐすぐすと泣き始めたフランドール。

緋色はその身体を抱きしめて、眠るように気絶した。

## 第四話

「心臓に刺してもなお、ここまで生きているなんて」

「久しぶりに食らったわよ。あんな痛いやつ」

紅魔館の客室で、一人の勇者が布団に入っていた。

「どう？あの後、ランドールは何かを壊したかしら？」

「いいえ。妹様はなにも壊しませんでした。私は一度殴られました」

「そりやそうよ」

緋色が気絶したのは、咲夜のナイフによる物だった。

緋色は確かに咲夜のナイフを捉えたが、飛んでくるナイフは一本ではなかった。一つは確かに緋色が防いだ頭への一本。もう一つは、背中から心臓にむかって投げられていたのだ。

緋色はそれを避けようとはせず、自分の身体で受けた。これを避けてしまつたら、ランドールに当たってしまうからだつた。

「私はメイドさんの腕を掴んでいたのに、どうしてナイフが投げられたのかしら」

「掴まれる前に投げておいたんですよ」

あっけからんと言う咲夜。彼女の右腕にはギブスがつけられており、骨はバキバキに砕かれていた。

「しかし酷いですわ妹様も。私の腕をこんなふうにしてしまうなんて。お嬢様が来ていなかったらどうなっていたことか」

「自業自得でしょ。それに、フランドールはもうなにも壊さないわ。もし壊そうとしても、私が寸前で止めるから問題無いよ」

「つまりお嬢様が来ていなくても、貴方が私を助けてくれたと？」

「そういうことよ」

「腕は壊れたんですけどねえ…」

緋色が刺されていることに気づいたフランドールは、延々と泣いて咲夜を怒鳴り散らした。その際に、咲夜を力の限り殴り飛ばしてしまったのだ。フランドールの捕獲という命令に従ったとはいえ、対象外の者にナイフを投げてしまったことに反省した咲夜は、その拳を甘んじて受けた。咲夜の腕の惨状は、つまりはそういう事だった。

静かに笑って目を閉じる緋色。身体を上げようと思っただけで、傷が開くのが怖かったのでやめた。

「でも、お嬢様とやらには礼を言っておかないとね。私を治療してくれたんでしょ？」

「治療したのはパチュリー様ですよ」

「ああ、あのー…えつと…」

「紫色の魔女ですよ。あの図書館にいる」

「ああ、はいはい。あの人ね。じゃあそのパチュリーって人にも礼を言わないと」

「むしろこつちが言いたいくらいよ」

そこで目を開く緋色。

思った通り、そこには紫色の魔女がいた。

「あ、パチュリーさん。有難うございます。私の治療をしてくれて」

「いえいえ、此方こそ。妹様を宥めてくださって、本当に感謝しておりますわ」

すこし巫山戯て言うパチュリー。しかしその顔が真剣であることぐらい、緋色にだつて分かつていた。

「私の傷、うまく治せたかしら？」

「ええ。少し痕が残っているかもしれないけれど、生活には支障が無いはずよ」

「それは良かった」

少し安心したように笑う緋色。

今の緋色の姿は、ほぼ全裸のようなものであった。

胸にサラシを巻いて、新品のパンツを履いている、ただそれだけである。露出した肌は美しく、傷どころかシミの一つすらない。

それは凶暴な魔物を相手してきた、勇者とは思えない姿だった。

「守り抜いたこの身体に、痕ができたのは少し勿体無いけれど、それ以上に死ななかつた事が嬉しいわ。それがやっぱり一番だ」

「はあ、勇者らしからぬ発言ね」

「あら、失礼ね。会って数日も経っていない相手にそんなこと言うのかしら」

「数日以上経ってるわよ」

「え」

どこからともなくカレンダーを取り出す咲夜。その速さは、光の勇者を持つてしても捉えることは不可能だった。

「貴方が紅魔館に入った日がこの日で、今日はこの日。6日経ってます」

「……うわ、最悪。やっぱりナイフ避けとけば良かったわ」

緋色の脳内に浮かぶのは、巨大な二対の角を携えた小鬼と、美しい青髪を持った天人。心配なんかしないと思うが、一応天人の方は緋色の恩人である。緋色が幻想郷に落ちて来た時、緋色を受け止めてくれたのは他ならない彼女だ。彼女がいなければ今頃緋色は天界の変死体になっていただろうし、フランドールに出会うこともなかっただろう。

だから、緋色は天子に感謝していた。

「なんか昨日青い髪の女が押しかけて来たけれど、彼女は貴方の知り合いなの？」

「来てたの？はあ…私の恩人、会いたいわ」

「タイムリングが悪かったわね」

無表情で呟く。パチュリー。

緋色はそつと上半身を上げ、背を伸ばして背骨を鳴らした。

「あああああお……ふう、もう大丈夫なようね。どこも痛く無いわ。メイドさん」

「十六夜咲夜です」

「じゃあ咲夜さん。なにか着替えは無いかしら？そろそろお嬢様とやらに会いたくてね」

「…かしこまりました」

咲夜の姿が一瞬ブレたかと思うと、次の瞬間には既に服を持って来ており、緋色は少し驚いた。

緋色は今だに咲夜の瞬間移動のトリックを暴けていない。瞬間移動など、光を操る自分にさえ困難であったからだ。

「これ、どこから持って来たの？」

「買ってまいりました」

パクったんじゃないかと疑ってしまうほどの手際の良さに、緋色は少し溜息を漏らす。



咲夜の持ってきた服はとてもシンプルなデザインで、襟のついた白い長袖と、ただのジーンズのような物であった。

緋色はそれを適当に着用し、その場で二、三度跳ねてから咲夜に礼を言う。

「ありがとう、咲夜さん」

「お安い御用ですわ」

軽い足取りで出口へと向かう緋色。

それからお嬢様の元へ行こうとするが、最終的には咲夜が道を案内をした。



特別広い紅魔館の一室。6日寝込んだ光の勇者は、ある少女との感動の再会を果たしていた。

「ヒーロー!」

「フランドール!」

がしい!

そんな音が聞こえてしまうほど、緋色とフランドールは力強く抱き合った。緋色はそのままクルクル回って、持ち上げてまた抱きしめる。

緋色の聞いた話によると、フランドールは緋色の看病を毎日手伝っていたらしい。

緋色はそれがなんとも嬉しくなって、惜しみなく感情を爆発させた。部外者である緋色の身勝手に起こった事件であったが、結果良い方向へ傾いたので誰も咎めることはできなかつた。

「緋色、背中大丈夫？痛くない？また刺されなかつた？」

「大丈夫よ。全部パチュリーさんが治してくれたわ」

心配そうに背中を摩るフランドールに、緋色は思わず口を緩ませる。

頭を撫でる動きが早くなってしまうのは、仕方が無いことだった。

「ゴホン…：フラン！」

そんな感動の再開に水をさすように、部屋の上段でわざとらしい咳が聞こえてきた。

そこにいるのはこの館の主、レミリア・スカーレット。500年の時を生きた吸血鬼である。

フランドールの名前を呼び、椅子から立ち上がって歩き出すレミリア。

しかしその視線は、やはり緋色を下に捉えて離さなかつた。

「フランって誰かしら？」

「私の愛称だよ。緋色も呼んで良いよ？」

「あら、ありがと。私も何か考えようかな」

レミリアを軽く無視して会話を続ける緋色達。その様子にレミリアは軽く青筋を立て、頬をひくつかせながら作り笑いをした。

「あはは…あつはは。そこの貴方、用があるわ。私のところに来なさい」

「あら？私の事かしら。何かくれんのかな」

上機嫌に笑ながらレミリアの元へ向かう緋色。レミリアは堂々と仁王立ちをし、緋色が上がってくるのを待った。

「どうも、お嬢様。私に何の用かしら？」

「…まずは、礼を言うわ。495年の呪縛を解いてくれて有難う」

「どういたしましたして、お嬢様。呪縛とはよく言ったものね。貴方が作った呪縛なのに」

「……そのお嬢様っていうのやめなさい。私はレミリア・スカーレットっていう名前があるの。この紅魔館の主をやっているわ」

改めて自己紹介をするレミリア。

スカートの切れ端を軽く持ち上げ、頭を下げた優雅に振舞った。

それを見た緋色は胸に手を当て、人知れず奥歯を噛みしめる。

か、可愛い…

ブランドールの時にも襲って来た衝撃が、再び緋色を脅かした。

「あら、どうしたの？」

「あはは、なんでもないわ。なんでも」

ペしペしと頬を叩いて、なんとか頬の緩みを止めようとする緋色。気を抜くとすぐに恥ずかしい笑い声が出てしまいそうになって、頬を赤くして頭を掻いた。

「変な人……まあそれで、なんと言うか……うちの者が随分迷惑をかけたらしいわね」

「別に。迷惑かけられたって自覚はないわ。私は勇者だもの。当たり前のことをしたままでよ」

ナイフで刺されたのは迷惑だったけれど、と付け加える緋色。

その様子に溜息を吐いて、レミリアは一つ指を鳴らした。

咲夜を召喚する合図だ。

「切腹ですか？」

「違うわ！まったくと、よく聞きなさい」

完璧なようはどこか抜けている咲夜。緋色は苦笑いをこぼしている。

するとレミリアは緋色の前に立って、高圧的な態度で指を差した。

「ねえ、貴方。確か……勇者だっけ？」

「緋色よ。姓はないわ」

「それじゃあ緋色。貴方、家がないそうじゃない」

「まあ、そうね。最近来たばかりだし、天子にでも養ってもらおうかと思ってただけ

ど」

「困ってる?」

「…まあ、そうね。困ってる…のかしらね?」

危機感なさそうに話す緋色。レミリアは数回頷いて、隣にいる咲夜に耳打ちをした。すると咲夜はにつこりと笑って、その場から消え去った。

「どう?家が見つかるまで、紅魔館に泊まっていかない?」

「良いの!」

「え、ええ。問題ないわ。今咲夜が空き部屋の掃除をしてくれているし」

天に向かって突き刺すようにガッツポーズをする緋色。家がなくとも耐えられるが、食事をしなければ死んでしまうからだ。

つまりは、タダ飯が食べられることに歓喜しているのだった。現金な勇者である。

「よっしゃ!勿論、食事は出るのよね!」

「も、勿論」

「フラン。私の守るものが102に増えたわ」

「ええ!」

穏やかな朝の一室で、少女たちの声が響いていた。



「…これで、良かったのか？」

「ええ、礼を言いますわ。あの外来人を引き止めてくれて」

「……こちらとしては、嵌めているようであまり良い気はしないのだがな」

「ふふふ…」

突如として現れる目玉だらけの『スキマ』不気味に開く底なしのスキマから、一体の化け物が現れた。

口元に開いた扇子を当て、妖美に微笑む金髪の女性。細く鋭い眼光から、レミリアは逃れられなかった。

「ところで、いきなり緋色を引き止めろだなんて…どうしたんだ？」

「あら、緋色って言うのね。その外来人」

暗い、レミリア専用の個室。

吸血鬼の性質からか、どこか冷たい印象を受ける部屋の空気は、この二人の会話によつて更に冷たくなっていった。

「話題を逸らすな。私の聞いていることはお前の目的の詳細だけ、今度は何を企んでい  
る…八雲紫」

「……うふふ、そうね。スペルカードの事もあるし、貴方には教えてあげましょうか」

今回の紅霧異変は、スペルカードルールを広めるために行われた作られた異変であった。八雲紫の目的は非殺傷のルールを立ち上げ、幻想郷を安定させる事。

そのルールに従わせるために、育て上げた博麗の巫女を異変に投入して、武功を上げて名声を得ようという魂胆だった。名声を手に入れ有名になった博麗の巫女は、少なからず周りに影響を与える。それを利用してスペルカードルールを広める計画だったのだ。

その計画はほぼ完璧に成功した。博麗の巫女は無事紅魔館の主を倒し、スペルカードルールはさらに広まった。だが、ここで謎の危険分子が現れてしまった。

光の勇者、緋色であった。

この存在は何をどうしたのか、八雲紫ですら感知できない方法で幻想郷にやって来た。

危険であった。この八雲紫が、今に至るまでその存在に気づけなかったのだ。

だから八雲紫は動いた。愛する幻想郷を守るために。

身構えるように指を絡めるレミリア。眼光は更に鋭くなり、額に一粒の汗が伝った。一つ深い深呼吸をし、眉間を揉んで目を閉じる。

何を恐れているんだろう？レミリアは歯を食いしばった。

緋色に危害が及ぶことか？

自分に危機が迫ることか？

否、全て違う。レミリアは気づいていた。495年間放っておいた分際で、今更フランを心配している。そう、フランが傷ついてしまうのが、レミリアには堪らなく恐ろしかったのだ。

その時レミリアの手に痛みが走った。そこには深く食い込んだレミリアの爪。レミリアは知らぬ間に自らの手に爪を突き立てていた。

「ふふ……そう怖がらないで。私が貴方達姉妹に危害を加えることは無いですわ」  
「……くっ」

扇子によつて揺らめく金髪。その下にあるであろう下劣な笑みに、レミリアは悔しそうに俯いた。歯の軋む音がして、その膨大な妖力が漏れ出す。

「怖い怖い。その妖力を止めてくださる？」

「早く教えろ」

「……分かりましたわ」

諦めたように肩を竦める紫。しかしその口は、歪んだまま戻らない。

ギラギラと光る牙を晒しながら、怒気を強くさせるレミリア。プライドの高い吸血鬼は、自分が下に見られることに嫌悪感を抱いていた。試されるのも嫌いだし、遊ばれる



ことも嫌いだ。馬鹿にされることも嫌いであるし、無視されるのは以ての外。

その全てを同時にこなすような八雲紫を、レミリア・スカーレットは毛嫌いしていた。「そうね、私の目的は唯の『監視』。それ以上でもそれ以下でもない」

「…本当だな？」

「無論ですわ」

そうか、と言つて背を向けるレミリア。その背後には、八雲紫の姿はもうなかった。



今日も今日とて図書館の風景にさして変わりはない。ただ巨大で古めかしい本棚が乱立し、その身を支え合っているだけの現状である。ただ巨大で古めかしい本棚が

しかしその中心には見慣れない人物が二人存在した。

両者とも美しい金色の髪を持っており、異なる事情でこの図書館の主に迷惑をかけている人物。

普通の魔法使い霧雨魔理沙と、光の勇者緋色であった。

「この本借りてくぜー!!」

「ちよつとこれ読めないんだけど！私の母国の言語は無いのー!？」

「うわああああああおああ!!」

あまりの面倒さに発狂してしまうパチュリー。両者とも人の話を聞かないし、両者とも勝手に物を攫って行く。

床に手を当て、できる限り大声でパチュリーは喚く。紅魔館の気狂いは、これですべてになつてしまった。

「ねえ聞いているのパチュリーさん! ちょっとここち来なさいよ」

「返事がないってことは良いってことなのか? サンキュー! ありがとな!!」

高速で頭を回転させて引き止めるべき相手を選ぶパチュリー。魔法陣で埋め尽くされる視界。しかしその視界の中心には、黒白の魔法使いをしっかりと捉えていた。

パチュリーは考える。ここで彼女を逃しては、何かを失ってしまうような気がしてならなかった。

実に何時もの彼女らしくない回答。

だが、その直感とも言える回答に、パチュリーは迷わず従った。

「させるか! この泥棒が!」

「おっと、勘違いしてもらっちゃあ困るなあ…私が死ぬまで借りて行くだけだぜ!!」

「それを泥棒って言うのよ!」

一斉に放たれる七色の弾幕。それを物ともせず魔理沙は躲して飛翔する。幾つもの

属性を携えた弾幕が魔理沙の身体を掠めて行くが、それは対した障害にはならなかった。

眺めているだけでも心奪われる光景――そして魔理沙が図書館を出て行くかと思われたその時、魔理沙の近くを緋色が通りかかった。

「ひ、緋色！その女を止めて!!」

「あ?」

最後の希望と言わんばかりに、パチュリーはその貧弱な喉に鞭を入れた。そして口を開けてそれに反応する緋色。

その瞬間、途轍もない速度で魔理沙は加速を開始した。合間に星型の弾を幾つも飛ばし、余裕の笑みで扉を指す。

だが、魔理沙は侮っていた。緋色に速度で勝負した時点で、魔理沙の運命は決まっていたのだ。

「ちよつと、呼んでるわよ」

魔理沙の伸ばした手が扉の取っ手を掴むその瞬間、魔理沙の重心は大きく傾く。

右手が何かに引つ張られているような感覚。いや、実際に引つ張られていたのだ。魔理沙の表情は驚愕に染まる。目を大きく見開いて、後頭部を強く打ち付けた。

「あがつ!?!」

「…大丈夫？」

魔理沙は頭を押さえながら悶絶する。緋色はそんな彼女に手を差し伸べ、その身をしっかりと地上に立たせた。どんななりであったとしても、それが人間ならば手を差し伸べる、勇者故の行動だ。

しかし魔理沙は思わず緋色の手を引いてしまった事を急に悔しく思い、その手を払いのける。いきなり手を叩かれた緋色は口を尖らせ、不機嫌そうに魔理沙を睨んだ。

「何よあんた。感じ悪いわよ」

「なんだお前こそ、ってかお前、あの時の腰抜けじゃないか」

腰に手を当て緋色を睨み返す。魔理沙は緋色の顔に覚えがあった。それは紅霧異変の際の事、この大図書館で魔理沙と緋色は一度遭遇していたのだ。

あの時のことを魔理沙は思い出す。

あの時緋色は魔理沙の弾幕ごっここの申し出を、即答で断ったのだ。誰が見ても魔理沙の戦いぶりに怖気付いたと思うだろう。なぜなら、魔理沙は緋色と会う前に、パチュリーと一戦交えていたからだ。

「ゲホッ、ゲホッ…緋色。そいつの持つてる本を取り返しなさい。ここに泊まらせてあげてるんだから、せめてそれくらいは働いて」

「…まあ良いでしょ。なんか釈然としないけど、私は勇者で寛大なんだから」

「うわっ！」

喘息持ちのパチュリーは、久しぶりに酷使した喉を労って、小さな声で命令する。すると渋々といった様子で緋色の手はまっすぐに魔理沙の手元へ動き、呆気なく本は取り返された。魔理沙はその動きを避けようと奮闘して、箒から落ちて尻を着いてしまう。

「ほら、パチュリーさん。上手くキャッチしてね」

「むきゆっ?!ちよつと、いきなり投げないで」

背表紙を前にして投げ出される古本。それは風を切ってパチュリーの元へ飛び、ばらけることなく収まった。

「おい！何してんだよお前！」

「はあ?こつちの台詞よ。てか誰よあんた」

「な……ッ！」

歯を食いしばって目を見開く。

自分のことを忘れていたと言う緋色に、何故か魔理沙は腹が立った。

実際には唯、少ししか見ていないから記憶に残っていないというわけで、魔理沙の印象が薄かったというわけではない。だが、どうやら魔理沙はそれをあまり良く無い方向へと解釈してしまったようだ。

具体的には、『気にする程の相手ではない』などと。

「もう許さないぞ！クソ野郎！弾幕ごっこで片付けさせろ！」  
「野郎じゃないんですけど」

魔理沙の右手が発光し、白い長方形の物体が現れる。それとともに、八角系の物体も姿を表した。

魔理沙それを緋色に突きつけて、その名前を叫ぶ。

「恋符『マスタースパーク』!!」